

フランス語の支持動詞と結合する述語名詞の語彙構造について\*

Sur la structure lexicale du nominal prädicatif  
dans la phrase à verbe support en français

小川 定義  
Sadayoshi OGAWA

0. はじめに

支持動詞(*verbe support*)文とは、(1-3)のa.文のように、ある種の基本動詞の後に述語名詞を従えるものを指す。第29回大会では、現代フランス語の支持動詞文の語彙構造を、支持動詞とその後の述語名詞の統語関係を論じつつ、*faire*のイベント構造を考察した<sup>1)</sup>。この構文の意味的な核は、述語名詞であることは明かである。この種の文では、通常の動詞とその目的語の結び付きから算定される意味合成とは異なった意味の合成が行われる。支持動詞文では、通常、動詞の項がある位置に述語が生起していることが一つのポイントである。前回の発表の結論は、イベント構造を中心に語彙的意味を考えていくPustejovsky (1991a, b)のメンタル・レキシコンの枠組みを適用し、支持動詞は、語彙概念レベルではイベントを項とし、文のイベント・タイプは基本的には述語名詞がもつイベント・タイプにより決定されることであった。

小論では、これを踏まえ、どのような述語名詞にどのような支持動詞が結合しうるのかという問題を取り扱う<sup>2)</sup>。また、(1-3)に掲げた *faire*, *avoir*, *donner* といった典型的な支持動詞のみならず、その他の動詞の後にどのような名詞が起こり得るのかという、いわゆるコロケーションの問題、そして支持動詞にはどのような拡張があるのかという問題にも触れる。このように、動詞の範囲を広げる理由は、Gross (1968)や木下(1992)も述べているように、支持動詞とされる動詞の集合は、決して閉じた類ではなく、ある程度緩やかなものであるので、典型的な支持動詞のみに限定すると、動詞と名詞句の選択関係の性格とその多様性が明確にならないと思われるからである。

1. 単文中における動詞と目的語類の選択関係の下位分類

伝統的に、支持動詞文の問題は、動詞の名詞化として扱われてきた。(1)のa, bの対にあるように、動詞 *décrire* から名詞の *description* が派生し、両文ともに同じ名詞句 *la scène* を目的語としている。このことは、(2), (3)の各対についても言える。

(1)

a. *Jean a fait la description de la scène.*

b. *Jean a décrit la scène.*

(2)

a. *Luc a une réelle volonté de régler l'affaire.*

b. *Luc veut réellement régler l'affaire.*

(3)

- a. *Luc a donné une réponse à cette interrogation.*
- b. *Luc a répondu à cette interrogation.*

すると、支持動詞文は、おしなべて、動詞を元に出てきたと考えられるかもしれない。しかし、(4)の例のように、支持動詞文の方が先にあり、それから動詞が派生する場合や、支持動詞文は存在するが、その中の名詞に対応する動詞が存在しない(5)のようなケースも見られる<sup>3)</sup>。

(4)

- a. *Paul fait le lézard pendant toute la journée.*
- b. *Paul a lézardé pendant toute la journée. (lézard < lézarder)*

(5)

- a. *Paul donnera une beigne à Luc.*
- b. *\*beigner*

単文(*phrase simple*)での、動詞と目的語類の関係は、(6)のように分類されると考える<sup>4)</sup>。a.は、通常他動詞文、b.は、支持動詞文、そして、c.は、支持動詞より一層意味内容の「濃い」動詞プラス述語名詞である。c.は、典型的な支持動詞文b.の拡張であると考えられる。

(6)

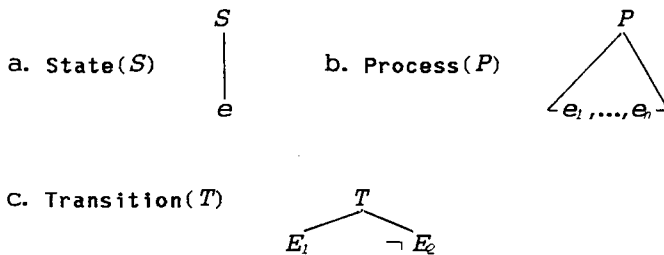
- a. N<sup>0</sup> V N<sup>1</sup> ; projective inheritance  
"cospecification"
- b. N<sup>0</sup> V(verbe support) N<sup>1</sup> Ω ; event structure  
"event-type matching"
- c. N<sup>0</sup> V(verbe support) N<sup>1</sup> Ω ; "lexical extension"

後に詳しく述べるが、(6a)では、名詞句N<sup>1</sup>が、動詞を選択し、この関係は、投射的継承関係と呼ばれる(Pustejovsky 1991a, b 参照)。この関係は、名詞の項構造とも言える *Qualia* 構造と動詞の内在的なイベント構造から算定される。(6b)の支持動詞文では、動詞と述語名詞句双方のイベント・タイプの合致(*event-type matching*)により、相互の選択関係が決まる。最後の(6c)では、(6b)に基づいた語彙的拡張が起こる。つまり、基盤となる支持動詞文に、容態副詞が加わったり、あるいは、主語に特定の名詞句が加わり、これらの情報が語彙化された動詞が、元の支持動詞文と同じ目的語類を選択する。

## 2. イベント・タイプと支持動詞

Pustejovsky(1991a,b)によれば、イベントは、状態(State)、プロセス(Process)、そして推移(Transition)の三つに大別される<sup>5)</sup>。状態は、単一のイベントであり、他のイベントと照合して評価されないものである(7a.参照)。プロセスは、(7b)に示したように同一の意味内容であると見なされるイベントの連鎖である。推移は、対立するサブ・イベントと照らし合わされて評価されるもので、意味的には、作因(CAUSE)と始動相(INCHOATIVE)を内包する。(7)の(a.-c.)の表示中で、小文字のe、大文字のEは、サブ・イベントを示し<sup>6)</sup>、これらの左から右への線的順序はそのまま時間軸上の前後関係を表す。また、iv)に示すように、これ以降、各々のタイプのイベントを $e^s$ 、 $e^p$ 、 $e^t$ と表すことにする。

(7)



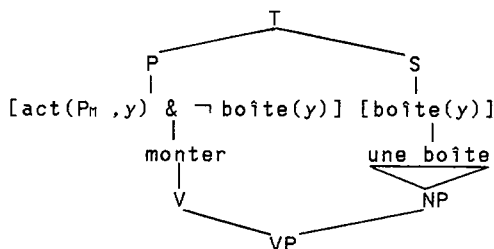
d.  $e^s$  (state),  $e^p$  (process),  $e^t$  (transition), Pustejovsky (1991b)

推移の文(8a)、(9a)は、それぞれ(8b)、(9b)のイベント構造を持つと考えられる。(8b)は、サブ・イベントP、Sを含む。第一のサブ・イベントPでは、Pierreが、ある物体yに対して、動詞monterで示される行為を行い( $act(P_n, y)$ )、同時に、yが未だ、boite(箱)でない状態が存在する( $\neg \text{boite}(y)$ )。このサブ・イベントは、Pierreが、単一の意味内容と見なされる「組立」という行為を続けているので、プロセスと同定される。第二のサブ・イベントSで、yは箱である状態にあり( $\text{boite}(y)$ )、この状態は、第一のサブ・イベント中での、その逆の状態と対立するので起動相の意味が導出される。また、Pierreの意図的な行為により、このような状態の変化が生じたのであるから、Pierreは、動作主として箱の完成に関与したことも導かれる。

(8)

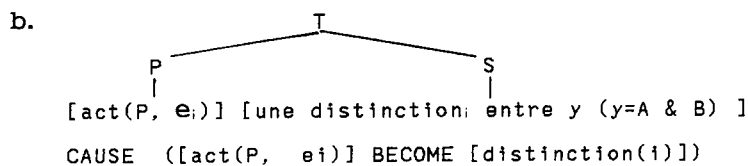
a. Pierre a monté une boîte.

b.



一方、支持動詞文(9a)のイベント構造(9b)の第一のサブ・イベントでは、Pierre は何かを行うが、そこでは、何を、何について行うかは特定されていない。というのも、支持動詞 *faire* は、その主語が、あるイベントを起こすという程度しか、意味的な「肉付け」を持たないからである。第二のサブ・イベントでは、*distinction* (識別) がされた状態があり、このイベントと、第一のサブ・イベント中の Pierre の行為の対象である *e* の間に同一のインデックスが振られ、その行為は「識別」として同定される。

(9) a. Pierre a fait une distinction entre A et B.



支持動詞 *faire* と述語名詞の結合は、*faire* が、推移、または、プロセスのイベントを選択することにより大方決定される。このことは、(10a)で示す。A は、文の動作主を示す。従って、*faire* の語彙的意味は、(10a')のように書くことが可能である。つまり、この動詞は、主語 *x* が動作主となりイベント *e* を起こすような性質をもつ。また、*e* のイベントタイプと内容は、述語名詞が決定し、その範囲は、T (推移) 及び、P (プロセス) である。

支持動詞には、これ以外に、*avoir*、*donner* など、基本動詞中の基本動詞が含まれるが、これらが支持動詞として用いられた場合、どのようなイベントを表す述語名詞を取るかは(10b, c)で示す。

(10)

a. *faire*      A → Event <transition>, <process>

a' *faire* (verbe support):  $\lambda y e [ \text{cause}(e) \wedge \text{agent}(e, y) ], (x=T, P)$

b. *donner*      A -C→B:      <transition>, <process>

c. *avoir*      A · B      :      <state>

*donner* は、(10b)に見るように、AとBの間にCが取り交わされる主題役割関係が基本になりつつ、プロセス、または、推移のイベントを表す。また、*avoir* は、状態のイベントを選択すると言ってよい。(10c)に示したごとく、主語Aと目的語Bは、全体-部分の関係、あるいは、譲渡不能の所有関係(これをA · Bで表す)に入る。このこと



ケーキを焼いた」という意味だが、これは、もう出来ているケーキをさらに加熱したのではなく、ケーキを作った訳である。そして、(14a)の  $bake_1$  の語彙的意味は、(15a)のように表すことができるであろう。ここでは、 $x$  と  $y$  が参与者であり、イベント  $e'$  がある。その内容は、「焼く」というプロセスであり、 $x$  が動作主となり、 $y$  に対しこの行為を行うものである。(15a)の式形の変項  $x, y$  に値を入れたものが(15b)である。従って、(13b)のイベント構造は(15b)の下の表示により示される。ここで、注意すべき点は、文のイベントタイプを投射しているのは、動詞  $bake_1$  のみであるという点である。

(13)

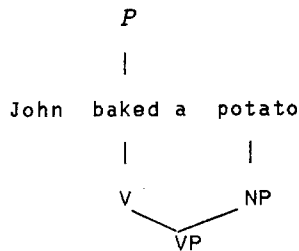
- a. John baked a potato.
- b. John baked a cake.

(14)

- a.  $bake_1 = \text{change}(x, \text{state}(y))$
- b.  $bake_2 = \text{create}(x, y)$

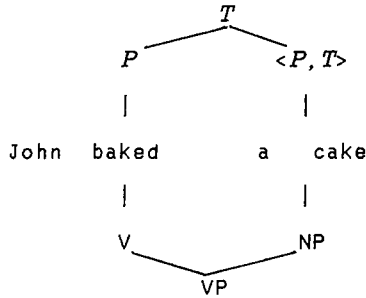
(15)

- a.  $\lambda y \lambda x \lambda e' [\text{bake}(e') \wedge \text{agent}(e', x) \wedge \text{object}(e', y)]$
- b. *bake* (process)  
 $\exists e' [\text{bake}(e') \wedge \text{agent}(e', j) \wedge \text{object}(e', a\text{-potato})]$



- c. *bake* (transition)

$\exists e', e'' [\text{create}(e', e'') \wedge \text{bake}(e'') \wedge \text{agent}(e', j) \wedge \text{object}(e', x) \wedge \text{cake}(e'') \wedge \text{object}(e'', x)]$



また、 $\text{bake}_2$ の語彙的意味は(15c)のように書ける。この定式中には、 $e'$ と $e''$ の二つのイベントがあり、前者 $e'$ は「焼く」プロセスで、このイベントが二番目のイベント、状態 $e''$ を作り出す。詳しく言うと、 $e'$ の動作主はJohn( $j$ )であり、ある物 $x$ がケーキではないプロセス(object( $e', x$ ))が同時に存在し、最終的に $x$ がケーキになっている状態 $e''$ がある。定式中にcreate という述語が入っているが、これはどこから生じるのであろうか。これは、ケーキという名詞を、人工物であると認める我々の知識から生じる。ケーキのQualia 構造は簡略に言えば、(16)のようになる。 $Q_1$ は、ケーキで示されるもの\*\*x\*\*が $y$ 、人工物であり、 $y$ がそれを作り出すという性質を表示する。一方、目的役割 $Q_2$ は、\*\*x\*\*は $z$ が食べるためのものであることを表示する。(16)

- a.  $Q_1$ : artifact (\*\*x\*\*) & create ( $y$ , \*\*x\*\*)
- b.  $Q_2$ : eat( $z$ , \*\*x\*\*)

ケーキはこのように人工物であるので、ステージ・レベルのイベント述語、つまり、(15c)の表示にあるようにプロセスから推移のファンクション<P, T>であると解釈される。このように考えると、(13b)文のイベント・タイプを決定しているのは、動詞のみではなく、その目的語との組合せによることが理解される。言い換えれば、動詞bakeがプロセス、及び、推移のイベントを表現し、多義的に見えるのは、この動詞がどのような名詞句を目的語として取るかに依存する。

次に、名詞のQualia 構造が、イベント構造と協力し、任意の文脈において、ある名詞が発揮する論理的な柔軟性を説明する例をみておこう。これは、(17a, b)に見られる「叙述のプロトタイプ度」に関するものである。文脈なしでも(17a)の方が(17b)よりも自然と感じられるか、それは何故だろうか。「囚人(prisoner)」のQualia 構造は、(18)で表現される。構成役割 $Q_1$ は、人間であり、罪があること、そして、目的役割 $Q_2$ は、 $y$ が $x$ を刑務所に閉じ込めることである。

(17)

- a. A prisoner escaped last night.
- b. A prisoner ate dinner last night.

(18)

$Q_t$ : human(\*x\*) & criminal(\*x\*)  
 $Q_r$ : [confine(y, \*x\*) & location(\*x\*, prison)]

ところで、動詞 **escape** の語彙的意味は(19)のように書ける。

(19)  $\lambda x \lambda e \exists e', e'' [\text{escape}(e') \wedge \text{act}(e') \wedge \text{confined}(e') \wedge \text{agent}(e', x)$   
 $\wedge \neg \text{confined}(e'') \wedge \text{object}(e'', x)]$

これは、次の様に読める。参与者  $x$  が関与する推移のイベント  $e'$  であり、そのイベントには、二つのイベント  $e', e''$  も含まれている。プロセスのサブ・イベントは、 $x$  が動作主となりある行為を行うことを示すが、それは  $x$  が、閉じ込められているプロセスと同時に起こる ( $\text{act}(e') \wedge \text{confined}(e') \wedge \text{agent}(e', x)$ )。また、状態のサブ・イベントは、 $x$  が閉じ込められていない状態である ( $\neg \text{confined}(e'') \wedge \text{object}(e'', x)$ )。

ところで、Qualia 構造の役割の値に、否定、時間の前後関係などの対立を含むオペレーターや、推移のイベントの責任者を表す act オペレーターを適用することを、Pustejovsky は、投射変換 (projective transformation) と呼び、その結果を当該名詞の投射的結論空間 (projective conclusion space) と呼んでいる。簡潔に言えば、これは、メンタル・レキシコンの中で働くと想定される力動的な概念間の関係を捉えるものであり、上位概念語、下位概念語の包含関係による固定的な語彙継承関係とは異なるものである。prisoner の目的役割を投射変換した例が(20)である。

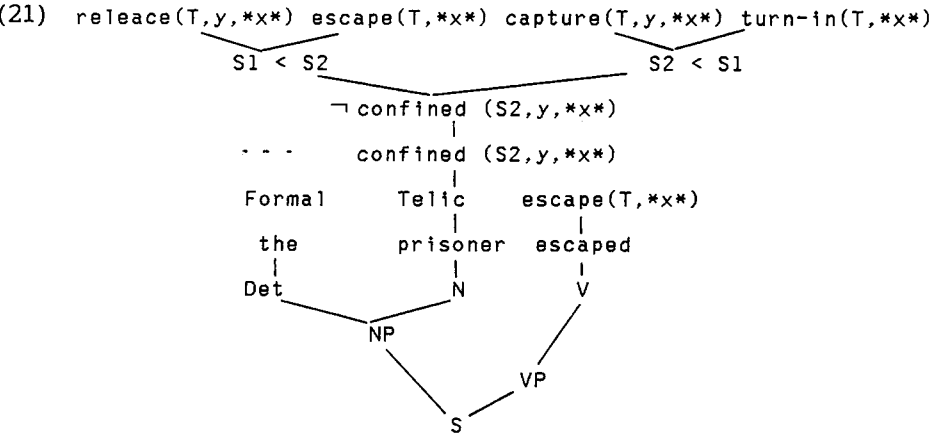
(20)

- a.  $\langle G: [\text{confine}(y, x) \wedge \text{loc}(x, \text{prison})]$
- b.  $\neg: E_1 [\neg \text{confine}(E_1, y, x)]$
- c.  $\exists E_2 [\text{confine}(E_2, y, x)]$
- d.  $\langle: E_1 \langle E_2 = T_1$
- e.  $\langle: E_2 \langle E_1 = T_2$
- f. act:  $\text{act}(x, T_1) = \text{"turn in"}$
- g. act:  $\text{act}(y, T_1) = \text{"capture"}$
- h. act:  $\text{act}(x, T_2) = \text{"escape"}$
- i. act:  $\text{act}(y, T_2) = \text{"release"}$



(20)のa.からi.は、順に、 $y$ が $x$ を刑務所に閉じ込めるという行為(a.)<sup>8)</sup>、 $y$ が $x$ を閉じ込めていないというイベント $E_1$ (b.)、その反対で、 $y$ が $x$ を閉じ込めているというイベント $E_2$ (c.)があり、d.はそれぞれ、 $E_1$ が $E_2$ より時間的に先行すること、そして、それが推移のイベント $T_1$ に対応することを表す。言い換えれば、 $T_1$ は、 $x$ が $y$ により刑務所に入れられることを示す。e.は、これとは逆に、 $E_2$ が $E_1$ に時間的に先行する推移のイベント $T_2$ を示す。f.からi.では、二つの推移イベント $T_1$ 、 $T_2$ に関して、 $x$ 、 $y$ の内どちらが責任を持つかで、名詞 **prisoner** の投射的な概念ネットワーク中に存在しうる述語が導き出される。f.では、刑務所に入ることに、 $x$  つまり、閉じ込められる者が、責任をもつ場合であり、これは自首("turn in")に相当する。 $x$ とは別の $y$ が $x$ の入所に責任を持つg.は、逮捕("capture")に対応する。一方、刑務所から出ること、刑務所に閉じ込められていた $x$ 自身が責任を持つh.は、脱走("escape")であり、 $x$ とは別の $y$ により $x$ が刑務所から出る場合は、通常、釈放("release")となる。

以上見た **Qualia** 構造中の目的役割の投射により、(21)の投射的結論スペースが得られる。この中に、**escape** という述語は存在するが、**eat the dinner** は、入っていない。これにより、(17a, b)に見られた叙述のプロトタイプ度の対比が説明される。



(13b)の例のように、名詞が動詞を選択する関係を、Pustejovsky(1991b)は、**co-specification**と呼んでいる。フランス語での例を見てみよう。書類、特に、法的な書類を **dossier** というが、書類を作るという場合、通常 **faire un dossier** とは言わず、動詞は、**dresser** か **etablir** が選ばれる(22a,b参照)。この二つの動詞は、共に「立てる」という基本的な意味を持っている。なぜ名詞 **dossier** にこの二つの動詞が結合するかは、**dossier** の **Qualia** 構造を考えることにより、ある程度目度がつくと思われる。この語の歴史的な背景を、少し調べてみると、**dossier** は、元来、椅子の

背もたれや、背にラベルのついた紙束を意味していたことが分かる(23 参照)。

(22)

a. #Jean a fait un dossier.

b. Jean a construit / dressé un dossier.

(23) *dossier*(>*dos*): 13<sup>e</sup>s., partie postérieure d'un siège  
 liasse de pièces qui porte une  
 étiquette au dos. (1680, Richelet)

ところで、*dossier* の Qualia 構造として(24)が考えられる。構成役割中の *Q*<sub>3</sub> に、表紙、背、束、また、形式役割の *Q*<sub>4</sub> に縦長という性質があり、目的役割 *Q*<sub>1</sub> に、*y* が作成し、しかるべき所に整理して保存すると記載されている。この役割の投射中には、(25)で示した語彙的意味を持つ *dresser* 「立てる」という述語が最善のものとして浮かび上がってくるであろう。

(24) *dossier*(\*x\*)

Constitutive role	[	<i>Q</i> <sub>1</sub> 紙(*x*) /material/
		<i>Q</i> <sub>2</sub> 重み(*x*) /weight/
		<i>Q</i> <sub>3</sub> 表紙 + <背(+ラベル)> + 目次 + 頁 + <束> /parts & component elements/
Formal role	[	<i>Q</i> <sub>1</sub> ( ) /orientation/
		<i>Q</i> <sub>2</sub> 厚み /magnitude/
		<i>Q</i> <sub>3</sub> 本型 /shape/
		<i>Q</i> <sub>4</sub> <縦長> /dimensionality/
		<i>Q</i> <sub>5</sub> ( ) /color/
		<i>Q</i> <sub>6</sub> ( ) /position/
Telic role	[	<i>Q</i> <sub>1</sub> [作成(y,*x*) & 保存(y,*x*) & 場所(*x*, 事務室,書庫)]
		<i>Q</i> <sub>2</sub> 閲覧(z,*x*)
Agentive role	[	<i>Q</i> <sub>1</sub> 作成(y,*x*) /creator/
		<i>Q</i> <sub>2</sub> 人工物(*x*) /artifact/
		<i>Q</i> <sub>3</sub> ( ) /natural kind/
		<i>Q</i> <sub>4</sub> ( ) /causal chain/

- (25) a. *dresser* 立てる :  $\lambda y \lambda x e^e e^s [\text{create}(e^e, e^s) \wedge \text{stand}(e^e) \wedge \text{agent}(e^e, x) \wedge \text{be-on-(z)}(e^e, y)]$  (z=place)

次に、(26)の連語の例を見てみよう。

- (26) *toucher le salaire*: 給料を受け取る, *salaire* 1260, Girard d'Amiens; lat. *salarium* de *sale*, *sel*, argent pour acheter du *sel*. (LDEJF)

フランス語では「給料を受け取る」を表現する場合、典型的な受給動詞の一つである *recevoir* ではなく、「触れる」という基本的な意味を持つ *toucher* を用いる。この場合も、その目的語名詞 *salaire* の *Qualia* 構造を考えることにより説明の糸口が見つかると言える。*salaire* は、元々、軍隊の用語で、兵士が塩を買うための金(あるいは、塩の現物支給のことをさしたのかもしれない)を意味していた(26参照)。ともあれ、塩(転じて金)は、生きるのに欠かせないものであり、大切なものに手で触れることが確実に受け取ることになるのであろうか。

以上、連語の二つの例を検討したが、*Qualia* 構造を規定するのは、語の歴史的背景も当然、考慮に入れなければならない。

#### 4. 問題点

次の例は、受給動詞 *donner* と *recevoir* が、支持動詞となり、ほぼ同じ意味を表している<sup>9)</sup>。

(27)

- a. Paul donnera une gifle à Luc.  
b. Luc recevra une gifle de Paul.

ところが、それらの動詞の後にくる名詞によっては、この関係が成り立たない場合がある。(28a)は、Max は Paul から誉められた、また、訪問を受けたという意味であるが、それに対応する逆の文では(27a)のように *donner* では許容されず、*faire* ならば許される。理由は、今の所、不明であり今後の課題となろう。

(28)

- a. Max a reçu (des éloges + une visite) à Max.  
b. Paul a (fait + \*donné) (des éloges + une visite) à Max.  
Gross(1989)

さて、転じて、中世フランス語では、現在では、それなりに見合った動詞が結合す

るところを、一律に *faire* が用いられることがあった。その例が(29)であり、現代フランス語では括弧内の動詞が用いられる。

(29)

- a. *faire des cris, une plainte (pousser, jeter)*
- b. *faire des questions (poser)*
- c. *faire la comédie (jouer, représenter)*
- d. *faire un combat (livrer)*
- e. *faire un larcin, une folie (comettre)*
- f. *faire un festin (offrir), LDFC*

支持動詞 *faire* は、意味的にはイベントを項としてとるだけの、非常に内容の乏しい動詞である。従って、歴史的には、結合する名詞が表すイベント・タイプとその内容を最善に表現するような動詞が取って代わっていったと推察することができるであろう。

さて、§ 2. の(10)で示したように、支持動詞 *faire* は、プロセスか推移のイベント名詞と結合する。(30, 31)の例参照。しかし、(31q)の例、*faire partie de* は、状態を示しているとしか考えられない。従って、小論の主張からは予測が付かないものに留まる。

(30)

- a. *faire dét tour + Ω: e'*
- b. *faire dét enjambée(s)+ Ω: e'*
- c. *faire dét pas +Ω) e'*
- d. *faire dét promenade(s)+ Ω: e'*
- e. *faire dét chemin + Ω): e'*

(31)

- a. *faire dét distinction + Ω: e'*
- b. *faire dét économie + Ω: e'*
- c. *faire effort: e'*
- d. *faire dét connaissance + Ω: e'*
- e. *faire preuve + Ω: e'*
- f. *faire dét signe + Ω: e'*
- g. *faire attention + Ω: e'*
- h. *faire irruption + Ω: e'*

- i. *faire peur* + Q: e'
- j. *faire dét entrée* + Q: e'
- k. *faire dét compte* + Q: e'
- l. *faire référence* + Q: e'
- m. *faire dét procès* + Q: e'
- n. *faire dét bruit* + Q: e'
- o. *faire dét choix* + Q: e'
- p. *faire dét constatation* + Q: e'
- q. *faire partie* + Q: e' 10)
- r. *faire dét synthèse* + Q: e'
- s. *faire dét promesse* + Q: e'

(32)は、(28b)とは異なり、*faire* と *donner* が競合する述語名詞である (Gross 1989 のリストから借用)。これらの名詞は、推移かプロセスを表現するが、それ以外は主だった特徴は見あたらない。*faire* と *donner* はどの様な名詞を共有し、どの様なものを排除し合うのかと言う問題は依然残る。

- (32) *accompagnement, adaptation, bécot, bise, convocation, correction, décharge, dégrèvement, délégation, démenti, détaxe, diffusion, imputation, inculpation, interprétation, invitation, mandat, notation, ordre, pension, preuve, prolongation, prolongement, prorogation, réalisation, récompense, recyclage, rente, réplique, réponse, rétribution* Gross (1989)

さて最後に、(6c)で触れた語彙的拡張の一例を見て置く。支持動詞 *donner* と結び付くある述語名詞のクラスは (33a.-e.) の動詞 (これらは *donner* の類義語と言えよう) とも結び付く。個々の動詞の意味は <*donner*> +  $\alpha$  というように、*donner* の基本的意味、つまり送り手、受け手の間に何物かの授受が交わされること—に付加的な意味  $\alpha$  が加わっていると考えられる。例えば (33a) は、同意、許可の上で授受が行われた、つまり主語が地位のあるものでなければならないという意味が加わる。言い換えれば、送り手と受け手の間に上下関係があるということである。また (33b) では、方向性、(33c) では、送り手が授受される物を付帯するという意味合いが加わり、(33d) では、手渡し、(33e) では乱暴な仕方、という付加的な意味が授受行為に加わる。つまり、*donner* の基本的意味に副詞要素 (*adjunct*) が加わったものが語彙化されていると言ってよいだろう。

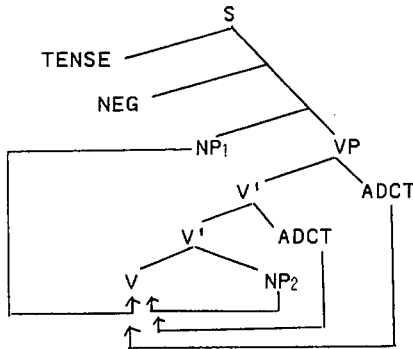
(33)

- a. accorder (許可/同意して ([N<sup>0</sup> + high], ADJ))
- b. adresser (方向性 (ADJ))
- c. apporter (付帯 (ADJ))
- d. passer (手 (ADJ))
- e. flanquer (くちわす (ADJ))

### 5. 結語

以上見た、語彙化、あるいは支持動詞のバリエーションの点から言えば、語彙的拡張は、主語を含め、副詞などが関与する。簡略化された文の基本構造として(34)を考えると、語彙化には文の語彙的中核の外にある時制、否定といった要素はなかなか関与せず<sup>11)</sup>、動詞の語彙的領域つまり、主語、動詞、目的語類、副詞類が納まる最小の文要素が問題となると言える。

(34)



結語として、動詞の語彙的意味、文のイベント・タイプ、語彙化の問題といったものは、文という単位なしには取り扱うことができないことを確認したと言える。

### 【注】

\*小論は、日本ロマンス語学会第32回大会(1994年5月21日、於鹿児島経済大学)での口頭発表に基づく。大会当日、貴重な御指摘をいただいた大高順雄、菅田茂昭、古浦敏生の各先生方に感謝する。しかし、小論の誤りはひとえに筆者のものによる。

- 1) 小川(印刷中)参照のこと。また、語彙的意味論でのPustejovskyのイベント構造の意義と非対格性の問題については小川(1992)、フランス語の与格心理動詞が持つ非対格性に関する問題点をイベント構造の点から考察した小川(1993)も参照。
- 2) Cattell(1984)は英語の当該構文で同じ問題を指摘するに留まっている。
- 3) このようなケースに言及しつつ、Gross(1989)は、新しい動詞は、むしろ、支持動詞をもとに産出されるのではないかと言っている。この点は、新造語の生成の性格の一面に触れ興味深いのが、小論では、これ以上触れない。
- 4) N<sup>0</sup> V N<sup>1</sup> Ω中、N<sup>0</sup>は、主語、N<sup>1</sup>は動詞の右に来る目的語類、Ωは、補語を表す。
- 5) Vendler(1967)の分類も参照。ここでの推移は、さらに到達(achievement)と達成

accomplishmentに分類されることもある。

- 6) e は単一の、E は内部構造を持つサブ・イベントを表す。
- 7) \*x\*の表記はxが指す現実の物を表す。
- 8) <G は、一般化オペレーター、Pustejovsky(1991a, 434) 参照。
- 9) Gross(1989) は、この様な対を<<constructions converses>>と呼んでいる。
- 10) 具体例は<<le déterminant fait quasiment partie de la forme lexicale du prédicat nominal en jeu>>: (J. Giry-Schneider, 1987,11)。
- 11) ここで言う否定とは、文否定のことを指し、構成素否定は考慮に入れていない。

#### 参考文献

- Cattell, R. (1984) *Syntax and Semantics*, Vol. 17: *Composite Predicates in English*, Sydney, Academic Press.
- Giry-Schneider, J. (1978) *Les nominalisations en français: L'opérateur <<faire>> dans le lexique*, Genève, Droz.
- Gross, G. (1989) *Les constructions converses du français*, Genève, Droz.
- Gross, M. (1968) *Grammaire transformationnelle du français, syntaxe du verbe*, Paris, Larousse.
- 木下光一(1992)「属格のEN再考」, 『フランス語学研究』, 第26号, 57-67.
- 小川定義(1992)「語彙構造・非対格仮説及びそれらの統語的反映」, 『上智大学言語学会会報』, 第7号, 175-235.
- (1993)「フランス語の心理動詞と「与格主語」について」, 『フランス語フランス文学研究』, № 63, 81-93.
- (印刷中)「現代フランス語の支持動詞と compositionnalité sémantique について」, 『福岡大学人文論叢』, 第25巻, 5号.
- Pustejovsky, J. (1991a) "The Generative Lexicon," *Computational Linguistics*, Vol 17, No. 4, 409-441.
- (1991b) "The syntax of event structure," *Cognition* 41, 47-81.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics and Philosophy*, Ithaca, Cornell University Press.
- LDEHF: J. Dubois, H. Mitterand, A. Dauzat, *Larousse Dictionnaire Etymologique et Historique du Français*, Paris, Larousse, 1993.
- LDAF: A.J. Greimas, *Larousse Dictionnaire de l'Ancien Français*, Paris, Larousse, 1992.
- LDFC: J. Dubois, R. Lagane, A. Lerond, *Larousse Dictionnaire du Français Classique, le XVII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Larousse, 1992.